

「長子の権利」

2021年03月05日

エサウはヤコブに言った。「その赤いもの、その赤いものを食べさせてくれ。私は疲れ切っているのだ。」彼がエドムと呼ばれたのはこのためである。ヤコブが、「それでは今すぐ、兄さんの長子の権利を私に売ってください」と言うと、エサウは、「ああ、もう死にそうだ。長子の権利などどうでもよい」と答えた。ヤコブが、「今すぐ、誓ってください」と言ったので、彼は誓って、長子の権利をヤコブに売り渡した。(創世記 25 章 30 節～33 節)

エサウとヤコブ兄弟は成長し、エサウは狩りが巧みな野の人、狩人になった。ヤコブは穏やかな人で、天幕に住み、家畜を飼う人になった。野性的なエサウと温和なヤコブは対照的である。父イサクは狩りの獲物が好物であったのでエサウを愛した。母リベカはヤコブを愛した。彼女は「兄は弟に仕える」という神の言葉を胸に秘めてヤコブに対している。親の偏愛はよく見られることだが、これが、兄弟の生涯の伏線になっている。

ある時、ヤコブは煮物をしていた。そこへ、野に狩りに行っていたエソウが空腹で、疲れ切って、帰って来た。エサウはヤコブに、「その赤いもの、その赤いものを食べさせてくれ。私は疲れ切っているのだ」とせがんだ。赤いものとはレンズ豆の煮物で、美味しそうな匂いを立てていた。エサウがエドム人の祖となっているが、エサウがエドム（赤い）と呼ばれた理由だと注解している。ヤコブは、「それでは今すぐ、兄さんの長子の権利を私に売ってください」と言った。長子の権利とは、族長が持っている神からの祝福、その祝福を財産と共に長子に継承していく権利である。長子の権利は当然、長男エサウが継承するものである。ところがヤコブは、赤いものの代価として長子の権利を求めようとしている。空腹に耐えかねて、エサウは、「ああ、もう死にそうだ。長子の権利などどうでもよい」と答えた。ヤコブは、「今すぐ、誓ってください」と念を押している。エサウは誓って、長子の権利をヤコブに売り渡した。エサウはヤコブが差し出したパンとレンズ豆を食べて、立ち去った。直情的なエサウは長子の権利を、このように軽んじた。ヘブライ書 12 章 16 節に、「誰も、エサウのように、淫らな者や俗悪な者とならないように気をつけなさい。エサウは一杯の食物と引き替えに長子の権利を売ったのです」と書いている。

ヤコブは、エサウが獲物を得られず、腹をすかし疲れ切って帰ってくるのを待って、レンズ豆を煮て、匂いを立たせていた。ヤコブが仕掛けた巧みな罠である。その罠にエソウはまんまとかかって、長子の権利を売り渡した。ヤコブはなぜ、エサウの弱点を突いて、長子の権利を狡猾に奪おうとしたのか。長子の権利は、当然、財産の譲渡も含んでいたが、信仰において、受け止める神からの恵みであり、目に見えるものではない。ヤコブは表面的には温和であるが、エネルギーで、並外れた生活能力を持っていた。しかし、エサウを罠にかけたように、自分が望むことはどんな手段を用いても手に入れる狡猾な人である。ヤコブは父イサクから財産の譲渡は一切受けていない。彼は父が受けたと同じ神の祝福が欲しかったのである。ヤコブは、祝福なしには生きられないほど、自分の中にある汚れた罪を知り抜いていたのではないか。だからこそ、長子の権利である、神との関わりをいただき、祝福に与って、生きていきたいと願った。人よりも神を重視したのである。罪を知った者の神への渴望がヤコブの人生の中核をなしている。彼は、幾多の苦難に襲われるが、その度に、神に祈り、救いと恵みを幼子のように求めている。エサウから長子の権利を何としても、奪い取りたかった。これが、ヤコブの人生の出发点になっている。